ふるさと猿橋

第一部・猿橋物語

<4>

構築、猿にヒント

奇橋に秘める〝大陸の発想〟

橋のたもとに宝暦五年（一七五五）建立の石碑がある。江戸の文人、鶴鳳郷の選とされる碑文は、次のような文句で始まる。

「我が大日本橋梁ノ奇ナル者 屏防ノ算橋 岐蛇ノ懸橋 峡ノ猿橋 是レノミ……」

屏防の算（そろばん）橋とは、半月五連の橋げたで有名な錦帯橋（山口県岩国市）。岐蛇（きそ）の懸橋は、中山道の名所・木曽の桟（かけはし）だが、さる四十一年の道路拡幅で姿を消した。峡（かい）の猿橋は、いうまでもなくわが甲斐の猿橋。現存する錦帯橋と猿橋が国の名勝に指定されている。

日本三奇橋の由来は、この辺にあるようだが、猿橋を有名にしたのは、その構造。両岸に栖（はねき、刎木とも書く）と呼ばれる直径五十㌢余の巨木を埋め込み、少しずつ突出にせり出していき、その上にさらに大い橋げたを渡す。橋を建てにくい地形にマッチした奇抜なアイデア。いつ、だれが考え出したものか。

山梨国語教育研究会編の「山梨のむかし話」（五十年刊）にこんな民話が紹介されている。

推古の帝の御世、百済（いまの韓国）から来た道興博士の志羅呼（しらこ）という人が、都から架橋に派遣されてきた。谷の長さ、深さがともに十七間（約三十㍍）、水深もかなりあって、苦心して架けた橋は何回も流された。そんなある日、たくさんの猿が群れ集まり、ツタやカズラを使いながら、前足で次の猿の後ろ足をつかみ、だんだんと伸ばして、ついに向こう側とつながり、その上を白い大きな猿が渡った。これを見ていた志羅呼は「そうだ、これだ」と……。

推古の御世といえば七世紀初め。この民話を裏付ける何らの史料もない。が、この「志羅呼伝説」は、かなり昔から地元に伝わっていたらしく、橋のたもとの石碑にもその記述が見える。

今回の架け替えにあたって、猿橋の歴史を研究している地元大月市の大沢良作さんは、この「志羅呼伝説」の根強さに改めて驚いた。そして桂川、葛野川など猿橋と縁の深い川の名称が、帰化人の本拠地・山城（いまの京都）にもあることから「創架の時代はともかく、猿橋の奇構は帰化人が持ち込んだ〝大陸の発想〟ではないか」と見る。

橋の奇構から移世の人々が連想した作り話、と一概に決めつけられない何かがあるというのだ。